

大府市議会

議長 山本正和様

大府市議会総務委員会

委員長 木下久子

報告書

～若者とまちづくりについて～

令和2年5月

大府市議会 総務委員会

1 はじめに

当委員会は、令和元年6月20日、本市における若者の現状及び課題を把握し、今後の市政運営に生かすため、所管事務調査として「若者とまちづくりについて」の調査を行うことに決定し、以降、閉会中を中心に調査を行ってきた。

このたび、調査研究の成果を取りまとめたので、その内容を以下のとおり報告する。

2 調査研究テーマの選定理由

当委員会は、テーマ選定に当たっての議論の中で、特に多く出された「若者」というキーワードを軸に調査研究することで一致した。その際、若者の地域参画の現状、若者の力を生かしたまちづくり、就学・就職によって地元を離れた若者に地元へ愛着を持ってもらう手法、若者の政治参画、青少年の居場所づくりなど、様々な意見や課題が出された。

若者には、まちづくりに積極的に関わる人と無関心あるいは関心はあるが関わっていない人がいるという点、共通の認識として議論された。まずは、様々な考えを持つ若者を分けて考えず、若者がまちづくりに対してどのような思いを持っているのか、また、若者の力を借りて行うまちづくりには、まちや若者にとってどのような効果があるのかについて考えていくこととした。テーマとしては、行政に関する諸課題等も多面的に包含できる言葉として、「若者とまちづくりについて」とし、「市への提言」という形式にとられることなく、調査研究を行うこととした。

なお、本報告に記載する「若者」とは、義務教育を過ぎたおおむね16歳から30歳代までとしている。

3 調査研究の概要

(1) 総務委員勉強会

調査研究を行うに当たり、まず、本市が取り組む若者に関する施策や若者を取り巻く現状や課題について学ぶため、市民協働部青少年女性課の職員を講師とした勉強会を実施した。

本市における若者に関する施策は、青少年の非行防止事業、青少年健全育成事業、青少年支援事業、子ども・若者支援事業の四つに大きく分けられ、それぞれにきめ細やかな支援がなされていることの説明を受けた。

その後の委員意見交換会では、「最近の若者」とひとくくりにはできないほど若者の考え方が多様化していることや行政との接点が少ないこと、そして、将来、地域に積極的に関わってもらえるようなきっかけをつくっていく必要があることなどが議論された。

また、若者と関わる際の注意点として、若者なりの考え等を認めた上での議論が必要であり、大人の価値観を押し付けることがないように気を付けなければならない

いことが挙げられた。

勉強会からは、若者の多様性について学び、様々な面から調査研究を行うことが大切であると確認した。

(2) 総務委員情報交換会

まちづくりなどの地域活動に関わる若者の意見を直接聴くために、「大府市若者駅前プロジェクト実行委員会」と情報交換会を行った。

若者駅前プロジェクトは、若者が「駅前のにぎわいづくり」という行政課題に取り組む事業であり、令和元年度は11月30日のイルミネーション点灯式の実施を目指し、実行委員会で行っていた。

大府市若者駅前プロジェクト実行委員会への参加の理由については、「ボランティア活動に興味があった」、「大学の必須単位であった」、「生まれ育った大府市で何か役に立ちたいと思った」など、きっかけは様々であった。当初は、あまり意欲的ではない若者もいたとは思いますが、活動していく中でたくさんの人と出会い、友達や仲間が増え、活動が楽しいと目を輝かせて話をしてくれたことが、何より印象的であった。そのような彼らの姿からは、目標に向かって協力し、議論する過程が、とても充実したものとなっていることが伝わってきた。イルミネーション点灯式の成功を目指し、メンバーが一丸となっていることも感じる事ができた。



大府市若者駅前プロジェクト実行委員会との情報交換会の様子

情報交換会後の委員意見交換会で、若者を主体とした施策とは、まちのために若者の力を活用する「まちづくり（にぎわいづくり）」が目的なのか、若者の成長のためにまちや大人が関わる「ひとづくり」が目的なのか、主眼をどこに置くかによって調査研究内容の今後の生かし方が異なるのではないかといった議論がなされたが、この段階では、その目的をどちらかに絞ることはせず、どちらの視点も持ったまま、今後の調査研究を進めることとした。

(3) 市外視察調査

市外視察調査を行った愛知県新城市及び福井県鯖江市は、どちらの市も、「若者の力を活用したまちづくり」を創意工夫の上、実施していた。それぞれの市の施策の概要や特徴は、視点をそろえて比較を行うため、以下の表に記載した。

考察の参考として、本市の若者に関する事業のうち、「若者の力を活用したまちづくり」という趣旨に類似すると考えられる「若者駅前プロジェクト」についても、よりわかりやすく比較するため併記した。

市名	愛知県新城市	福井県鯖江市	本市
事業名	新城市若者議会	鯖江市役所JK(※1)課プロジェクト	若者駅前プロジェクト
開始年度	平成27年度	平成26年度	令和元年度
目的	総合的に若者が活躍するまちの形成の推進を図り、もって市民が主役のまちづくり及び世代のリレーができるまちの実現に寄与すること。	若者自らが企画する地域活動に、大人を巻き込みながら実践することを通じ、若者・女性が進んで行政参加を図り、まちに「にぎわい」を創出する新たなモデル都市となること。	駅前のにぎわいづくりという行政課題に対応し、達成感を味わうことで、若者の自己肯定感、自己有用感を高めること。
事業概要	若者や地域を取り巻く諸課題について、検討や議論を行い、市長への答申を経て、政策を提言する。	女子高生が自由なアイデアを出し合い、市民や団体、地元企業、大学、地域メディア等と連携・協力しながら、自分たちのまちを楽しむ企画や活動を行う。	若者が主体となって実行委員会を組織し、地域の方々と連携し、大府駅東西のロータリーを中心に、若者自らデザインしたイルミネーションを設置する。
対象となる若者	市内在住、在学、在勤の、おおむね16歳から29歳(定員20名以内) ※平成28年度からは市外委員制度も導入	鯖江市に在住、若しくは鯖江市内の高校に通う女子高生(高等専門学校生含む)	16歳から29歳までの、イルミネーションやイベント企画に興味がある若者

※1 JK…「女子高生」の略で、女子高校生を指す語のこと

市名	愛知県新城市	福井県鯖江市	本市
募集方法	公募	公募	公募
周知方法	チラシ、市ホームページ、広報紙、ダイレクトメール等	Twitter、口コミ等	チラシ、市ホームページ、広報紙、口コミ、市内の学校への推薦依頼等
実現した事業	<ul style="list-style-type: none"> ・市図書館の郷土資料室、まちなみ情報センターのパソコン室をリノベーションした多目的スペースの提供 ・若者議会のPR発信 ・若者による防災関連市民団体の立上げ等 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリジナルスイーツの開発 ・ゴミ拾い企画の実施 ・水鉄砲による公園の芝生への水やり ・地場産品等とコラボレーションした商品開発やPR事業等 	<ul style="list-style-type: none"> ・大府駅前東西ロータリーのイルミネーション企画、設置 ・イルミネーション点灯式及びイベントの企画、広報、運営 ・地域商店などへの協賛金の依頼 等
その他特筆すべき事項	<ul style="list-style-type: none"> ・会議等への参加で1日3,000円の委員報酬あり ・予算あり（毎年度1,000万円が上限） ・市若手職員や若者議会卒業生によるメンター制度あり ・条例に基づく市長の附属機関 	<ul style="list-style-type: none"> ・報酬なし ・予算あり（令和元年度は130万円） ・活動趣旨に賛同した市民による類似団体の発足が複数あり ・法令遵守やプライバシー保護を目的としたガイドラインの作成あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・報酬なし ・予算あり（令和元年度は250万円） ・市制50周年を契機とした2か年計画の事業
事業の所管	企画部まちづくり推進課若者政策係	産業環境部商工労政課にぎわい推進室観光・学生連携推進グループ	市民協働部青少年女性課青少年女性係

視察した2市とも、手法は異なるものの、若者の率直な意見を、なるべく若者から出たままでもまちづくりに生かす施策の実施を心掛けていた。

違いとしては、新城市は、「新城市若者議会条例」に基づく市長の附属機関としての位置付けであるのに対し、鯖江市は、「鯖江市民主役条例」の基本理念に基づ

く事業ではあるが、市長の附属機関としての位置付けではない点が挙げられる。

それぞれに、なり手不足や事業が継続されていくことで起こるマンネリ化などの類似した問題や課題を抱えていることもわかった。

市外視察調査では、それぞれの市の若者と話す機会を得たが、どちらの市の若者からも、「事業に参加し、たくさんの人と関わったことは、自分自身の成長につながった」という旨の話を聴くことができた。

どちらの市も、入口は「まちづくりに若者の力を生かす」といった発想からの事業だが、結果として、若者が成長し、「ひとづくり」の面でも成果を残していたと言える。新城市については、メンター制度により若者とともに政策立案に携わる若手職員にとっての成長の場としても機能していることが確認できた。

また、鯖江市については、活動する中で、社会そのものが他人事から自分事へと変わり、主権者意識が芽生えたことで、令和元年10月には、鯖江市役所JK課プロジェクトのOG（卒業生）がJKOG課を発足させるに至った。当該事業が若者の継続的なまちづくり参画へのきっかけとなったと言える。



先進地視察の様子（左：愛知県新城市、右：福井県鯖江市）

(4) 総務委員研修会

大人の支援が必要な若者の実態を調査研究するため、ちた地域若者サポートステーションセンター長の山田学氏を講師として、研修会を行った。

「地域若者サポートステーション」（愛称「サポステ」）とは、厚生労働省から委託を受け、働くことに悩みを抱える15歳から39歳までの若者に対し、キャリアコンサルタントなどによる専門的な相談やコミュニケーション訓練、協力企業への就労体験等により、就労に向けた支援を行うための拠点である。

知多5市5町を所管するちた地域若者サポートステーションは、NPO法人ICDSによって、平成28年度から運営されており、知多半島の全ての自治体にサテライトとなる出張相談所を構え、若者の身近な相談機関として、活動を行っている。

研修会では、若者一人一人が活躍するためには、身体的にも精神的にも軸足の置ける居場所づくりが重要であることを学んだ。それが家庭や家族であることが理想

である一方、全ての若者がそうとは限らない現実も踏まえ、行政として、若者の居場所づくりをどういう形で取り組む必要があるかといった点については、長期的な課題であることを委員間で共有した。

4 今後、若者を主体とした施策を行うに当たり、留意してほしい点

(1) 若者の多様な考え方を受け入れる必要があること

当たり前ではあるが、若者は、私たち大人とは違う世代を生きる一個人であり、一人一人考え方が異なる。彼らの考え方やライフスタイルが多様であることを、まずは大人が受け入れることが大切である。

(2) 目に見える成果よりも、過程を大切にすること

若者を主体とした施策においては、性急に、目に見える成果を求めるのではなく、子育てと同様、若者の外的・内的な成長をじっくりと見守ることが大切である。若者は「人生における成長段階にいる」と認識した上で、結果に至る彼らの活動の過程を大切に考える必要がある。若者が自ら結果や過程を振り返ることで、いずれ、彼らの成長につながるのではないかと考える。

(3) 若者のありのままの意見を受け入れ、一緒に考える姿勢を持つこと

鯖江市では、『挨拶をしなさい』という言葉が女子高生には言わないよう気を付けた」という趣旨の話を聞いた。それは「挨拶をしなくてもいい」ということではなく、自然と挨拶し合えるような関係を目指してのことである。若者のありのままの意見を聴くためには、押し付けのない、対等な姿勢が大切である。つまり「信じて任せる」ことである。

また、鯖江市では、「若者が意見を言いやすい『ゆるい雰囲気（※2）』の中にヒントがある」といった話も聞いた。若者が、「大人の喜ぶような意見」ではないありのままの意見を言える「ゆるい雰囲気」の場で、一緒になって考え、悩むことは、大人にとっても新たな気付きと成長を得る、いい機会となるのではないかと考える。

※2 ゆるい雰囲気…鯖江市役所JK課プロジェクトの提案者である若新雄純氏（株式会社NEWYOUTH代表取締役、慶應義塾大学特任准教授等）の提唱する「成熟し、凝り固まった社会を周辺からゆるめることで、社会にグラデーションをつくり、多様性を受け入れる隙間を生み出す」ことを目指した概念

(4) 主体となる若者が中心となって決めることができる方策とすること

これまでの本市における若者を主体とした施策は、全てがゼロから始めるものではなかった。令和元年度の「若者駅前プロジェクト」についてはイルミネーションの実施がテーマとして掲げられていた。また、以前に企画された事業においても、「決められた日に、何かしらのイベントを実施する」という取り決めが当初からあった。

若者の自己肯定感や自己有用感を育てることを目的に掲げる本市だからこそ、始まりから終わりに至るまで、主体となる若者が中心になって決めることができる方策が望まれる。

その際の大人の役割としては、彼らの意見を尊重し、導くのではなく見守る姿勢に徹して、彼らの思いを形にするためのサポートを行うことである。若者が持つ「大人が気付かない部分の小さな気付き」と、大人が持つ「具現化する力」を合わせることで、新しい形の協働施策の実現が可能になると考える。

(5) 目的や理念はわかりやすいものを設定すること

これまでの調査研究によって、若者を主体とした施策には、当事者である若者だけでなく、市民にとってもわかりやすく、しっかりとした目的や理念が必要であることがわかった。

目的や理念は必ずしも難しいものや高度なものである必要はなく、まずは「若者に意見を述べる場に出てきてもらう」といったわかりやすく達成しやすいものとするこも、若者や市民に参加してもらう上では必要なことである。

(6) 「世代連鎖」を意識し、継続して実施すること

将来にわたってまちづくりに携わる人材を育てるためにも、施策を継続することはとても重要である。施策に関わった若者が、その後、また別の形でまちづくりに参画してもらえらるような施策とすることで、当事者を介して次の世代に連鎖させていくことが理想であるとする。

5 おわりに

調査研究テーマである「若者とまちづくりについて」は、改めて、自分たちが若者のときはどうであったかを考えさせられた。意見交換をした若者からは、自信に満ちあふれ、楽しく活動する様子が伺われ、これからの未来を担う彼らをととても頼もしく感じた。

ただ、彼らは私たちとは違う時代を生きているだけであり、「特別な存在」というわけではない。時代ごとの空気感は違って当然であり、彼らは彼らの時代を当たり前で生きているだけである。過度に特別視することなく、「若者」というフィルターを除いた一人の人として接することが大切であることも学んだ。

若者を主体とした施策は「ひとづくり」と「まちづくり」の両側面に効果をもたらすものであり、一体であることがわかった。自分事として地域や社会に関わり、様々な経験をすることで、ひとがつくられていくのではないか。それを長く継続していくことによって、多世代へも波及し、いつの日か、結果として、にぎわいのあるまちにつながっていく施策となることを期待する。

最後に、当委員会の調査活動に御協力いただいた全ての方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げ、本報告書の結びとする。

調査研究の経過

- (1) 令和元年6月20日（木） 総務委員会
 - ・ 所管事務調査事項の決定
- (2) 令和元年7月11日（木） 総務委員勉強会及び意見交換会（委員派遣）
 - ・ 市民協働部青少年女性課職員を講師とした勉強会の実施（委員7名全員）
- (3) 令和元年8月28日（水） 総務委員情報交換会（委員派遣）
 - ・ 大府市若者駅前プロジェクト実行委員会との意見交換の実施（委員6名）
- (4) 令和元年9月5日（木） 総務委員意見交換会
 - ・ 市外視察調査及び総務委員研修会の事前調整
- (5) 令和元年9月26日（木） 総務委員意見交換会
 - ・ 総務委員情報交換会後の委員間討議
 - ・ 市外視察調査及び総務委員研修会の事前調整
- (6) 令和元年10月15日（火） 市外視察調査（委員派遣）
 - ・ 愛知県新城市「新城市若者議会について」の視察調査の実施（委員7名全員）
- (7) 令和元年10月17日（木） 市外視察調査（委員派遣）
 - ・ 福井県鯖江市「鯖江市役所JK課プロジェクトについて」の視察調査の実施（委員7名全員）
- (8) 令和元年10月18日（金） 総務委員研修会（委員派遣）
 - ・ ちた地域若者サポートステーションセンター長山田学氏を講師とした「若者支援の現状と課題について」の研修会の開催（委員7名全員）
- (9) 令和元年10月29日（火） 総務委員意見交換会
 - ・ 市外視察調査及び総務委員研修会後の委員間討議
 - ・ テーマ活動全体会議及び報告書に向けた協議
- (10) 令和元年11月18日（月） 総務委員意見交換会
 - ・ テーマ活動全体会議及び報告書に向けた協議

- (11) 令和元年11月22日（金） テーマ活動全体会議
 - ・ テーマ活動に関する中間報告

- (12) 令和元年12月16日（月） 総務委員意見交換会
 - ・ テーマ活動全体会議後の委員間討議
 - ・ 報告書の内容の協議

- (13) 令和2年1月14日（火） 総務委員意見交換会
 - ・ 報告書の内容の協議

- (14) 令和2年2月3日（月） 総務委員意見交換会
 - ・ 報告書の内容の協議

- (15) 令和2年4月6日（月） 総務委員会
 - ・ 報告書の内容及び本会議での報告の決定

総務委員会委員名簿

(令和元年5月13日～令和2年5月13日)

役職名	氏名	所属会派
委員長	木下 久子	市民クラブ
副委員長	久永 和枝	日本共産党
委員	大西 勝彦	市民クラブ
委員	太田 和利	自民クラブ
委員	酒井 真二	自民クラブ
委員	山本 正和	自民クラブ
委員	鷹羽登久子	無所属クラブ

(備考)

正副委員長のほかは、議席番号順